

漫画『路傍のフジイ』考察

～ 承認欲求の素地、忖度の土壌、多様性の本質に関連して ～

2025 年 3 月 21 日

M.Fujii

“ 多くの人たちの価値観とは全く違う生き方をする男がここにいる。職場では空気みたいな存在の独身中年男性フジイだが、近づいてみると、その生き方は格好良い。コスパや承認欲求など、そういうもののために戦っている人生は、何だかどうでもよくなってくる、多分。 “

漫画『路傍のフジイ』（作者 鍋倉夫；2023 年 11 月初版；小学館発行）です。そして、「このマンガがすごい！2025」第 5 位に選出されました。

長い人生で、幸運な巡り合わせや出会いは、幾度かあるものです。

それが仕事の場合であれば、その幸運に巡り合ったとき、お客さまやまわりの人たちに、プロとして自分の最善を尽くした仕事でお返ししたい、と考える人は多いでしょう。最善を尽くしたかどうかを自己満足ではなく、あくまで相手方にとって他の選択肢と比べて自身の行動が最善足り得ているかどうか、の観点で自己評価したいと考える人も多いでしょう。そして、自身の行動が相手にとって最善な選択肢でなければ、次回のチャンスはないと考えがちです。

相手に認めてもらうように頑張る姿勢そのものに、承認要求の素地があります。相手がどう考えて評価しているか、の観点を自身の行動中心の軸に据えると、それは忖度の土壌を醸成します。いわゆる「ケインズの美人投票」と同じで、自身の個人的な判断ではなく、まわりの多くの人が最も票を集めるとされる女性を選ぶ行動とよく似ています。そこには相対的評価しかなく、自身の絶対的評価は外に追いやられています。

このような承認要求や忖度を考える姿勢を取ると、生きていくのはなかなか辛

い、というのも事実です。

また、「上司ガチャ」「親ガチャ」なんて言葉も流行ったように、自分ではどうしようもない現実には不満を抱く人も少なくありません。

そして残念なことに、そんな現実を変えるのは難しいのです。

他人から批判されたとき、不幸体質の人は自信をなくすそうです。

では、メンタルが強い人はどうするのでしょうか。

おそらく「他者からの評価」に重きを置かず、「承認欲求」で動かないのでしょう。

他者と比較したうえでの相対評価ではなく、個人に対する賞賛は絶対評価をベースにしていると、メンタルが保たれるような気がします。

人間、誰しも他人から評価されたい、褒められたい、他者より優れていると証明したい欲求があつて当然です。そして、自己肯定感が低いと、つい他者からの評価を求めてしまいそうになります。しかし、自分の価値を他者からの評価に委ねてしまうのは危険なことです。ころころ変わる他人の心情に委ねたりせず、自分の評価は自分でするようにすることが、心の平安を保つことに繋がります。他人からの評価が良くとも悪くとも、それに振り回されないように努めるのです。

おそらく「相対的な評価」は“人間の根源的な価値ではない”という意識が非常に重要なのです。

もちろん、社会の役に立つことでお客さまやまわりの人たちなど他者から認められることもありますが、その評価を当てにしてしまうようになると、評価を得られないことには全く気乗りしなくなってしまうでしょう。

お客さまやまわりの人たち、社会への奉仕とは何でしょう。

「奉仕」とは「神に仕える者の責務」であり、褒められるから行動することではありません。褒められたときこそ慎ましく生きていこうという心持ちが大切なのでしょう。

自分を評価できるのは、最終的には自分だけです。

自分の人生を評価できるのも、最終的には自分だけです。

『路傍のフジイ』は、他者からの評価に一喜一憂せず、自分の価値を自分で決められるようになることの大事さを説いている、と思います。

上記の突き放された考え方が多様性を認める社会の中心となっているのでしよう。 多様性の本質は、こうした「自身の人生を評価できるのは最終的に自分だけ」を底辺に置いているような気がします。

例えば、何かのプロジェクトを成した際、「素晴らしい、面白い。」と言ってくれる人もいれば、「よく分からない、詰まらない、価値なし。」と言う人もいます。

もちろん、相手や他者の意見は非常に大事としながら反省し改善を図っていくことが必要なかもしれませんが、そういった他者からの評価に惑わされずに済ませることもまた大事なことです。

そして、自分の定めた目標を達成出来た場合には、自分を褒めてあげましょう。 そうやって 自分の価値を自分で決められる人が、真に「豊かである」と言えるのではないのでしょうか。

相手や他者から上手く評価してもらえない場合、自分の資質と努力次第でベストな存在になれそうな別の場所を見つければ良いわけです。 楽観的に考えれば、最善を目指した努力を積み重ねているうちに、実は多くの機会と幸運に繋がることも多いようにも思えます。

漫画『路傍のフジイ』（小学館）に関連して、17 世紀のフランス作家 ジャン・ド・ラ・ブリュイエール Jean de La Bruyère の『カラクテール（Les Caractères ou les Mœurs de ce siècle）』（1688 年）を見てみましょう。

『当世風俗誌～人さまざま～』として一時期岩波文庫で出ておりましたが、現在絶版で残念です。 宮廷、社交界、庶民の生態や生活を皮肉まじりに描いている作品です。 現代とあまり変わらない人間模様が描かれています。

(1) 「人々の間に貧富の差が生まれるのは、ほんの偶然に過ぎない。 社会的な成功そのものに目を奪われてはいけない。」 「接近、そして観察、最終的に勘定計算による他者判断を大抵の人は行う。 他者判断は、社会的な評価や富・地位を表す外見に基づいて行われていて良いのだろうか。」

⇒ モンテカルロ・シミュレーションなどの統計的な実験で、“貧富格差が拡大する状態に遷移するメカニズム” が記述しているように、現代でも貧富の差が生まれたり拡大するのは極めて確率的な、ある種必然のような気がします。

(2) 「本当に存在するのは、人間というより世界である。人間の運命の如何ともし難い儚さを考えるのは、矢継ぎ早の世代交代を観ていると分かる。人間が自分たちの意思の結果だと信じているものは、実は人間ではなく社会システムが機能した結果に過ぎない。単なる仕組みにしか過ぎないものに感情を込める必要はない。」

⇒ BBC Drama の “Luther” にも似たようなセリフがありましたが、「自分の行動は自分で決められるが、行動の結果がどうなるかは決められない。行動の結果は制御不能。ある行動が反応を呼び、それがまた別の反応を呼ぶ。そして、その全てが混沌に満ちた社会を作る。」ということでしょうか。

(3) 「社交集団の表面的な団結と内在する脆弱性、集団心理の虚しさを考えると、いつか集団としての団結は終わり、一体感は長続きせず、熱はいつか冷め切ってしまうことを覚えておく必要がある。また、仲間の言動は全て肯定し無批判に受け入れ、よそ者の言動は全て否定し排除するような人々の多さを覚えておく必要がある。」

⇒ ラ・ロシュフコー箴言集 No.375 「凡人は概して自分の能力を超えることを全て断罪する。」を思い出させてくれます。

自分を評価できるのは、最終的には自分だけです。

自分の人生を評価できるのも、最終的には自分だけです。

自分の価値を自分で決められる人が、真に「豊かである」と言えるのでしよう。

以上